



裏表紙

表紙

書 名：

平成24年度企画展

縄文前期のムラ

富士見市とその周辺

出版年月： 2013(平成25).2

著 者： 富士見市立水子貝塚資料館

本サイズ： A4サイズ(210×297mm)

ページ数： 31P

※当企画展の図録は水子貝塚資料館で販売（在庫の場合）

なか見！検索 コンテンツ：

- ・開催にあたって
- ・目次
- ・コラム1 貝塚の貝
- ・国指定史跡水子貝塚（一部抜粋）

開催にあたって

富士見市は埼玉県有数の縄文時代前期の遺跡が集中する地域です。市内には約60カ所の遺跡が存在しますが、その1/3にあたる20カ所から縄文時代前期の遺構や遺物が出土しています。それは、縄文海進による古入間湾と呼ばれる海が、富士見市の面積の約半分を占める現在の荒川低地に広がっていたことに起因しており、そのため貝塚も多く残されています。

富士見市での遺跡の発掘調査は昭和13年（1938）の水子貝塚が最初です。その後、昭和14年（1939）の水子貝塚と打越貝塚、昭和31年（1956）の殿山遺跡、昭和41年（1966）の打越貝塚と宮脇遺跡など、初期の発掘調査の対象は縄文時代前期の住居跡や貝塚でした。

昭和44年（1969）には水子貝塚が国指定史跡となり、昭和47年（1972）からはじまったみずほ台土地区画整理事業に伴う打越遺跡の発掘調査では、大規模な縄文時代前期の集落の存在が明らかとなり大きな注目を集めました。それから現在に至るまで、多くの発掘調査が実施されてきました。これまでに調査された縄文時代前期の竪穴住居跡は230軒以上にのぼります。まさに、富士見市の考古学研究の歩みは、縄文時代前期の遺跡の調査とともにあったといえます。そして、出土した土器や石器などの資料も膨大な数にのぼります。それらの中には考古学研究には欠かすことのできない貴重なものもあり、これまで一度も公開される機会のないまま収蔵されてきたものもあります。

今回の企画展は、富士見市内の縄文時代前期の遺跡調査成果を紹介することを目的とし、この時期の集落をテーマに、その特徴や変遷をまとめた内容となっています。また、富士見市だけではなく、埼玉県南西部の地域も対象とし、より広い視野で遺跡を俯瞰できるようにしました。本展が地域の歴史学習や遺跡保護への理解と、「遺跡のまち富士見」のPRにつながれば幸いです。

最後に、本企画展の開催にあたり、貴重な資料の出品にご快諾いただいた機関、並びにご協力いただいた皆様に心より感謝申し上げます。

平成25年2月10日

富士見市立水子貝塚資料館

目 次

開催にあたって

目 次

例 言

1	縄文時代のムラ	1
2	縄文時代前期の年代と区分	2
3	縄文海進と貝塚	4
4	始－花積下層式期のムラ	5
	コラム1 貝塚の貝	
	コラム2 打越ムラのうつりかわり	
5	昇－関山式期のムラ	9
	コラム3 縄文時代草創期の石器を再利用？	
6	盛－黒浜式期のムラ	17
	コラム4 山梨県から運ばれた土器	
	コラム5 集落研究の画期となった上福岡貝塚	
7	展－諸磯 a 式・b 式期のムラ	27
	コラム6 低位台地のムラ	
8	終－諸磯 c 式・十三菩提式期のムラ	30

協力者・協力機関

主な参考文献

コラム1 貝塚の貝

縄文時代前期の貝塚の多くは、竪穴住居の中に残されています。廃屋となり埋まりかけた住居跡を貝殻などの残滓の捨て場に利用したからです。

古入間湾の貝塚はヤマトシジミを主体とします。古入間湾は遠浅の砂泥底質の干潟で、そこに河川から淡水が流れ込み、河口付近は汽水域となっていました。この汽水域はヤマトシジミの生育にはもっとも適した環境でした。ヤマトシジミ以外の貝では、干潟の砂泥質～砂質底の鹹水（海水）域に生息するマガキ、ハマグリ、オオノガイ、河川の淡水域に生息するオオタニシ、カワナガが目立ちます。また、ヤマトシジミとハマグリは春～夏、マガキは冬に採取していたことが判明しており、縄文人も旬の時期を知っていたようです。

これに対し、奥東京湾の貝塚は砂泥～砂質底の鹹水域に生息するハイガイ、アサリ、マガキを主体としています。奥東京湾は汽水域の少ない海だったと思われます。



6 盛－黒浜式期のムラー……………17

この項目内から水子貝塚の部分、その抜粋

■国指定史跡水子貝塚（富士見市）

新河岸川を臨む標高約18mの台地上に位置しています。昭和13年（1938）に東京考古学会によりはじめて発掘が実施され、2軒の貝塚を伴う竪穴住居跡が調査されています。その後、昭和14年（1939）には東京帝国大学人類学教室によって竪穴住居跡1軒、昭和42年（1967）に富士見町教育委員会によって貝塚の分布調査とあわせ竪穴住居跡3軒が調査されています。これらの成果により、縄文時代前期の大規模な環状貝塚であることが明らかとなり、昭和44年（1969）に39,346㎡が国史跡に指定されました。平成3年（1991）から平成4年（1992）にかけて史跡整備事業に伴い竪穴住居跡9軒が調査されました。

水子貝塚は、黒浜式期の約60カ所の貝塚が直径150mの範囲に環状に分布する古入間湾岸では最大規模の遺跡です。貝塚の下には竪穴住居跡の存在が予想され、さらに貝塚を伴っていない竪穴住居跡も相当数あると思われます。史跡指定地内に集落はおさまるものと予想されますが、東側に隣接する東前遺跡では黒浜式期の貝塚を伴わない竪穴住居跡が1軒単独で出土しています。史跡指定地内では、これまで黒浜式期8軒、諸磯a式期6軒、計14軒の前期の竪穴住居跡が調査されています。しかし、実際に発掘調査されたのは指定地の約5%にすぎません。そうした意味では、不明な点の多い遺跡といえます。

水子貝塚の出土土器・石器



6号住居跡出土土器

器高 左から(22.0)cm (20.0)cm (24.0)cm 11.0cm (26.0)cm 黒浜式土器



16号住居跡出土土器 1

器高 左から(15.0)cm (29.0)cm (20.0)cm (20.0)cm (25.0)cm (20.0)cm 黒浜式土器



16号住居跡出土土器 2

器高 左から(20.0)cm (17.0)cm (21.0)cm (15.0)cm 21.0cm (21.0)cm 黒浜式土器



15号住居跡出土土器 1

器高 左から15.0cm (33.0)cm (25.0)cm 10.0cm 40.0cm 20.0cm (14.0)cm (30.0)cm 19.0cm 黒浜式土器



15号住居跡出土土器 2

器高 左から(17.0)cm (31.0)cm (22.0)cm (15.0)cm 37.0cm (12.0)cm 19.0cm (29.0)cm (18.0)cm 黒浜式土器



15号住居跡、16号住居跡出土石器

上段は石斧、下段は左から棒状磨石（すりいし）、敲石（たたきいし）である。左上長さ14.5cm。